1964年 昭和39年 10月10日 土曜日
サンケイ新聞夕刊

世界をつなぐ〝東京祭典〟第18回オリンピック開会式
94か国選手、堂々の入場 聖火…いま赤々と燃ゆ

鐘が鳴る。鳴りわたる。やがて電子音楽のひびきとなって、十万人の国立競技場から晴れあがった秋空にこだまする。第十八回オリンピック東京大会のトビラをひらく音だ。昭和三十九年十月十日午後二時。とうとうやってきた。史上最大、九十四か国、七千六十人の世界の若ものたちを日本に迎えて、アジアで初めてのオリンピックがひらかれる。思えば〝東京への道〟は遠かった。昭和五年、東京市がオリンピック招致を決定してから足かけ三十五年。あれいらい、わたくしたち日本人の胸の中で、消えつ現われつしてきた幻想の聖火は、きょう、まぎれもない現実のほのおとなって、神宮の空にもえる。

（石井　英夫　記者）

光と歓呼の中を

晴れた。国立競技場はひかりにあふれている。

砂丘のスロープに似た競技場の美しい曲線は、十万人の熱気をのんで、秋空に、際限なくふくらんでいきそうである。

緑のシバ、レンガ色のアンツーカーをへだてた向こう正面スタンドの下に、一対の火炎太鼓。極彩色の雲とほのおにふちどられた太鼓は、ぴいんと皮をはりつめている。開会を待つ大観衆の興奮で、いまにもひとりで鳴りだしてしまうのではないか。そんな気までしてくる。

ようやく午後一時三十分。縦八・七㍍、横三二・四㍍の大電光掲示板に、オリンピック東京大会開会式を知らせる英文が、スルスルッと流れた。つづいて、近代五輪の父、クーベルタン男爵の有名なことばがつづく。

「オリンピックで重要なことは、勝つことではなく、参加することである……」

五百六十人の大音楽隊から「オリンピック序曲」が、海鳴りのようにわきおこった。そしてとつぜん、十万人のどよめきを静めて、鐘の音が競技場にひびきわたる。黛敏郎作曲の電子音楽。日本の伝統のひびきを伝える各地の「ぼん鐘」と、もっとも新しい「電子音」を組み合わせたふしぎな音色が、やがて深い波紋をひろげてゆく。

天皇、皇后両陛下がお着きになる。

午後二時、選手団の入場行進がはじまった。

北口トラックに、青地に白十字の旗がさっとひるがえって、先頭はもちろん、オリンピックの発祥地、ギリシャ。その旗手は、あの聖火リレーの第一走者だったマルセロス君（二八）ではないか。ひと月半前、オリンピアの聖地でトーチをかざした右手に、いましっかりと国旗をささえている。わきあがるスタンドの歓声のなかには、「ごくろうでした」といった親密なひびきがある。

国名のアルファベット順に行進は続く。

スタンドの北口付近からどよめきが起こった。たったひとりの選手の入場だ。アフリカから遠来の新興国カメルーン、もちろん初参加である。陸上百㍍に出場するニジトク君（二三）、コーヒー色のはだを赤いトルコ風の帽子、うす黄色の民族衣装に包み、晴れ晴れと歩く。

ようこそニジトク君。

緑、黄、赤三色旗のエチオピアの旗手は、アベベ選手だ。スタスタとゆく。

統一ドイツは五百人を超える、この大会最大のデレゲーション選手団を送ってきた。〝壁〟をのりこえ、五輪マークをつけた〝統一〟の旗を先頭に、歩調を合わせて進む。あたりまえのことだが、東だか西だか、まったく見分けがつかない。この青年たちが、オリンピックのあとは、また壁をへだてて暮らすのだろうか。

拍手と感激のウズ

入場行進は続く。

ゲート近くでわきあがった拍手が、行進につれて正面スタンドに移り、やがて南側スタンドに移る。それを追って、また新しい拍手の波がおこる。たえまなく打ち寄せる波のように、拍手と興奮が、スタンドをうねって、高まってゆく。

天皇陛下はただおひとりロイヤルボックスの正面に立たれ、選手団のごあいさつにえしゃくを送られる。

キューバ選手団がボックス前にさしかかると、いっせいに服のかくしから日の丸の小旗をとり出して振った。陛下も思わずニッコリとあいさつを返された。

「ヘーシンク、ヘーシンクだ」と、観客席がざわめく。そう、ヘーシンク六段（三一）である。でかい。丸太のような腕だ。不敵な表情で旗ザオをつまんでいる。足は〝すり足〟。いかにも柔道家だ。

新しい国コンゴもたったひとりの行進だ。どこよりも温かく大きな拍手に包まれて進む。

――胸にこみあげてくるものがある。ひどく気はずかしい思いをして、記者席のまわ

りを見やると、なんだ、みんな同じではないか。

スタンドのあちこちで、ハンカチが動く。いや、トラックでは、涙をふきながら行進している選手もいる。

オリンピックというやつは、一体なんなのだ。スポーツであってスポーツでない。お祭りのようであって、ただのお祭りともちがう。有名な顔、無名の顔。黒いの、白いの。ノッポにチビ。先進国に新興国。はずかしいが、いまはじめて名前を聞いた国もある。チャド、マリ、アンチル、トリニダード・トバゴなど。

たしかに、皮膚の色もことばもちがう。食べものから、顔の洗いかたまでまちまちだ。それがいま、スタジアムの中で、ひとつの心をわかちあっている。圧倒的な共感のなかにまざりあっている。インドネシアや北朝鮮の人たち、あなたたちにも、いっしょにこの道を歩いてもらいたかったのに…。

マーチの高まりにつれ、競技場は、ケンランたる色彩にあふれてきた。人間が思いつくことのできる、ありとあらゆる色が、秋の光の中に乱舞しているようだ。

アフリカのガーナ選手団は、〝ケンテクロス〟と呼ぶ民族衣装を披露してくれた。なんと説明したらいいか。一枚のカーテンをからだに巻きつけ、そのあまった端をひょいと肩にのっけた、というスタイルだ。赤、青、黄色のチェックの〝動くカーテン〟が風になびきつつ、ヒラヒラ行進している。

マダガスカルの男子選手たちはハデなタテジマのショールを肩にかけている。

ノルウェーの旗手はハラルド皇太子ご自身だ。

入場行進もおわり近く、星条旗をひるがえしてアメリカ大部隊登場。〝黒い弾丸〟ボブ・ヘイズ（陸上百㍍）や〝海ヘビ〟のサーリ（千五百㍍自由形）などの精カンな横顔をみた。

すぐそのあとを、ベージュ色の制服が、かたまりになって行進してくる。金メダル候補めじろ押しのソ連チームだ。

正面スタンド前でさっと赤いスカーフをとり出して手に手にふりながらスタンドにあいきょうをふりまいた。明るい〝平和攻勢〟である。

そして、最後に日本。三百七十八人の先頭、旗手福井誠君（二四）がささげている日の丸の、なんと鮮烈なことか。ユニホームも、日の丸と同じ赤のブレザーに白のズボン、スカートだ。

いる、いる。最前列には自信にあふれた顔のニチボーの魔女たち。この一戦に、青春のすべてを賭けてきた彼女らは、いま、どんな思いで歩みを進めていることだろう。木原美知子選手がかれんだ。池田敬子さんら女子体操陣のはつらつさ。

後陣は男子。神永、君原、円谷、寺沢、小野、遠藤、三宅…。酔ったように手をたたき、足をならす観客。「かしら、右」がぴったりそろった。やはり、どこよりも堂々と、みごとで、そして頼もしいではないか。

「がんばってくれよ、みんな」。

午後二時五十七分、天皇陛下が開会を宣誓された。ファンファーレ。かわいい鼓隊の行進。

聖火追う10万の目

北口ゲートにパッと白煙が走った。聖火がおどりこんできた。午後三時六分である。最後のランナー坂井義則君（一九）の右手に高くトーチがある。

八月二十一日、オリンピアの地で、かげろうとともに燃えたった聖火は、海外十二か国、日本全国の計二万六〇〇〇㌔を走って、いま終着地、国立競技場に到着した。

トラックを四分の三周する。力にあふれた若々しいフォーム。そのペースは時計の秒針のように正確だ。スタンドは息をのみ、鳴りをひそめ、十万人の目はただひとつ、聖火を追う。

聖火台への道、計百六十二段のスタンドを、坂井君はいっきにかけのぼる。みごとだ。

聖火台わきに、すっくと立った。点火。燃えた。ホッとためいきがもれ、スタンドは一度にくずれた。

どよめきがおさまったあとも、スタジアムを、なにかえたいの知れないものが、静かに揺さぶっている。なんのヘンテツもないタイマツの火が、なぜこうもわたくしたちをつき動かすのか。

オリンピアの火は、アジアの若ものたちの手から手へと受け継がれて、ここへきた。ひとびとはこの火に、平和への願いと、東京五輪成功のための祈りをこめてくれた。いまここに燃える火は、疑いもなく、世界の友情の〝あかし〟なのだと思う。十万人のスタジアムが揺れ動いたのは、平和と友情への心からの共感なのだと思う。通信衛星シンコム３号は、いま燃えさかるこの〝東京精神〟を、太平洋をこえて遠く地球の裏側にまで伝えてくれたにちがいない。

小野喬選手（二三）の高らかな宣誓がすむと、一万羽のハトが放たれ、いれちがいにF86ジェット機が飛来して、大空に五輪の輪をえがいた。

電光掲示板は、いまちょうどラテン語で「より速く、より高く、より強く」の三文字を、あかあかとうつしだしている。

人間中心の「科学」を問い直す

「物」から「生命」へ

（産経新聞論説用）

産経新聞論説用

産経新聞論説用

それに耳かき一ぱいほどの毒を盛ることを常としてきたからだった。▼「戦争に大義は無用である」「(従軍)慰安婦は軍の下半身だった」「反戦平和ほどうさん臭いものはない」「学校教育に強制は不可欠である」「日の丸・君が代のどこが悪いのだ」などと。とにかく時流に逆らうことばかり書き続けてきた ▼そういう人を

産経新聞論説用

産経抄

ことしを象徴する漢字は『災』だったが、年が押し詰まったところで地球的な〝大災〟が発生した。スマトラ島沖巨大地震の大津波では、万を超える人びとが波にさらわれた。日本人ツアー客にも多数の犠牲者がでているという ▼被害の広がりが気になるところだが、きょう二十八日は「仕事（御用）納め」。歳時記に「古筆も洗ひて御用納かな」（瓜青）の句がでていた。ところでもう一つ納めるものがある。小欄・産経抄も本日をもって筆者交代いたします。それが何と三十五年間も長居をしてしまっていた ▼日ごろ愛唱する言葉に「花は愛惜に散る」と。道元『正法眼蔵』のなかの詩句だが、ナニあの難解膨大な書物を読み通したのではない。教えられて聞きかじった言葉で、何事も惜しまれているうちに散れという戒めだったが、つい忘れていた ▼某夜、酒席で作曲家の船村徹さんから「お前さんの産経抄には毒がある」といわれたことがある。「ただし毒にも薬にもならぬコラムはコラムじゃない」とも。それを聞いてにんまりした。なぜなら、ひそかに耳かき一ぱいほどの毒を盛ることを常としてきたからだった ▼「戦争に大義は無用である」「（従軍）慰安婦は国家の下半身だった」「反戦平和ほどうさん臭いものはない」「学校教育に強制は不可欠である」「日の丸・君が代のどこが悪い？」などなどと。とにかく時流に逆らうことばかり書き続けてきた ▼そういうへそ曲がりで時代遅れの小欄にとっては、年貢の納め時がきたというべきかもしれない。晩唐の詩人・杜牧の一節に「長空　碧杳杳たり／万古　一飛鳥」と。担当は石井英夫でした。ありがとうございました。明日から小欄は新しい視点と切り口で再生いたします。

1993年 平成5年 6月20日
産経新聞朝刊

私と産経 「自由」と「民主」培う健筆陣

思うまま書いた24年 石井英夫 92年度菊池寛賞

昨秋、評論家の山本夏彦氏が産経新聞のＰＲ文を週刊文春に書いてくださったことがある。ご記憶の方も多いと思うが、その文章の最後は次のように締めくくられていた。

「……産経新聞の特色は一面のコラム・産経抄に最もよくあらわれている。二十年、保守反動といわれることをものともせず、ひとり思うままを書いた執筆者も執筆者だが、書かせた新聞も新聞だと私は感心している」

まことに過褒（かほう）なご批評に恐縮するが、なにしろ山本さんは毒舌と風刺をもって鳴る当代随一の皮肉屋である。たぶん、おしまいの「感心している」という表現の初稿は「あきれている」だったのではないか。

しかし山本さんが「ひとり思うままを書いた」と付言されたくだりは、まさにその通り。産経抄を担当していつか二十四年になり、週六本のペースで書いた本数は七千本を超えた勘定になる。数が多いのがえらいのでもなく、立派なのでもないが、この間一度たりとも新聞社の上司や内部から「これを書け」といわれたことはなかった。と同時に「これを書くな」といわれたこともなかった。

自分でいうのもナンだが、産経という新聞社の自由濶達（かったつ）さというか、度量の広さというか…それが褒め過ぎなら、太っ腹というか、おおざっぱというか。改めてこの産経が「モノをいわせる」新聞でありつづけたことを思うのである。

タンガラ記事

産経と私とは同い年で、互いに還暦を迎えた。それだけに感慨もある。入社した昭和三十年は戦後の鍋底不況のまんまんなか。赴任した札幌支局で、北海道新聞社会部の先輩記者Ｎ氏に教えられたことはまだ耳底に響いている。

霏々（ひひ）として降る雪の夜、ナワノレンでコップ酒を傾け、シシャモをかじりながらＮさんはいったものだった。「なあ、石井君よ、新聞記事はタンガラみたいなものではないか」。すでにＮさんのろれつも怪しい。

当時の暖房は石炭ストーブで、朝になると石炭は白い燃えがらとなるのだった。「夜が明ければタンガラは道に捨てられる運命だが、一夜は人の体を暖めたんだ。わ

が新聞記事も、一晩は人の心をぬくめたと思えばもって冥すべしじゃないか。そういう記事を書くべきじゃないか」

それが私の出発点だったが、この二十余年、産経抄で力をこめたテーマをいくつか思い起こす。

読者の太っ腹

「マスコミの教科書誤報で独り歩きしたうそ」「湾岸戦争でみせたテレビ文化人の偽善」「学校で東郷平八郎を教えることの当然」「金丸氏北朝鮮訪問のうさん臭さ」…言いたいことを言いたいように書かせてもらってきた。それをもって“右傾”や“保守反動”呼ばわりされたこともないではないが、当人は“まん中”と考えていたから気にしたことは一度もない。

そういったマスコミ論調が今になってこちらへすり寄ってきたのだから、笑止とも何ともいいようがない。

自然や季節のコラムといえば、早春のコブシの花が好きで“バカの一つ覚え”のように毎年書きつづけた。おかげで読者に「またか」と笑われたり、「まだか」と催促を受けたりするテーマでもある。

それもまた産経新聞の読者の寛容なおおらかさゆえだろう。読者の“太っ腹”にこそ深い感謝をささげたい。

◇

一九三三年、横須賀生まれ。五五年早大政経学部卒、同年産経新聞に入社。社会部、サンケイスポーツなどをへて論説委員、「産経抄」担当、八八年日本記者クラブ賞、平成四年菊池寛賞を受賞。